

第68回(2024年度) 北海道開発技術研究発表会論文

留萌地域における「ほっかいどう学」の実践と 今後の展望 —留萌地域のみち学習—

留萌開発建設部 道路計画課 ○堀田 孝也
留萌市立留萌小学校 高橋 基文
北海道苫前商業高等学校 虎野 正嗣

北海道総合開発計画（第8期及び第9期）に則り、当部においても「ほっかいどう学」を推進している。そのうち本稿では特に、児童・生徒たちの“道路”への理解を深めることを目的とした管内の小学校及び高等学校教諭等との協働による、「みち学習」の実践（小学生向けの道の駅学習用のデジタル教材開発及び高校生向けの観光教育の実践等）について報告するとともに、人口減少時代における地域学習の今後のあり方について検討する。

キーワード：ほっかいどう学、みち学習、道の駅、観光教育

1. はじめに

第8期北海道総合開発計画（平成28年3月29日閣議決定）で謳われた「ほっかいどう学」は、第9期同計画の閣議決定（令和6年3月12日）により、2期目を迎えることとなった。

この政策的背景としては、本格的な人口減少時代下にある我が国において、自ら考え地域に貢献する若い世代の育成、確保することが重要であり、地域に関する理解と人への投資方法として「ほっかいどう学」が有効という考えに基づく。「ほっかいどう学」の学習範囲は幅広く、地理、歴史、文化、産業、インフラ等多面的に北海道の魅力や個性を学習する。

留萌開発建設部管内においても上記主旨に則り、留萌地域に対する理解、地域に貢献する若い世代を育成する機会として、とりわけ「みち」というインフラを中心に、管内の小学校及び高等学校教諭等との協働による「みち学習」の取り組みを令和4年度より実施している。

本稿では、上記当管内における「みち学習」のこれまで3か年の取り組みについて報告するとともに、これまでの取り組み成果を現時点で評価し、人口減少時代における地域学習の今後のあり方についても思索を深めたい。

2. 1か年目（令和4年度）

留萌管内における「みち学習」の展開可能性を検討するにあたり、管内の学校教育における事例収集と協議会設置に向けた関係機関との調整を行った。

(1) 管内の学校教育における事例収集

「みち学習」の展開可能性を模索するにあたり、類似するインフラ学習の事例や地域学習の事例を収集し、対

象とする地域における学校教育の現況を把握することが望ましい。そこで、管内教育委員会等を通じて、管内市町村で使用されている小学校の学習指導要領や副読本等を収集し、精読した。収集した学習指導要領や副読本から、道路に関連する記述の有無や記述内容を下表に整理した。

その結果、留萌管内においても「みち学習」に類似する学習はすでに行われている一方、近年の道路施策に関わる記述は少なく（例えば、道の駅等）、留萌管内においても「みち学習」が展開できる可能性が示唆された。

表-1 留萌管内における「みち学習」の展開可能性

・ 留萌管内の副読本※の約4割が「みち学習」に関連する記述 ¹⁾ 。
・ 道路整備の役割、意義、地域の発展に道路が果たす役割に関する記述がみられる。
・ 道の駅、シーニックバイウェイやサイクルツーリズム等の近年の道路施策は紹介されていない。

※教科書を補助する教材として用いられる。多くは自治体ごとの教育委員会が中心となって製作される。

(2) 「みち学習」検討会の設置に向けたワーキング

「みち学習」の推進にあたり、学習内容の検討から学校教育での実装・評価といった一連の流れにおいて、管内の教諭の協力が必要不可欠である。そのため、認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム新保元康理事長（前北海道社会科教育連盟会長）の助言を仰ぎ、留萌管内での「みち学習」の担い手を確保することから着手した。

小学校においては、北海道社会科教育連盟の教職員の人的ネットワークを活用し、本稿の連名者である留萌市立留萌小学校高橋基文教諭・大門祐斗教諭に参画いただき、石田正樹校長も二人の後見役としてメンバーとなっ

ていただくこととなった。こうして令和4年度・5年度の2か年は留萌小学校教諭が中心となり“小学校ワーキング”として活動いただいた。

具体的なワーキングの活動を以下に記す。小学校ワーキングでは、ワーキングメンバーが道路管理者、施設管理者から道の駅の制度や各施設の概要の説明を受ける機会を設けた（写真-1）。この機会を通し、①社会科での授業づくりの可能性を確認し、②近年多面的な領域で価値を高めつつある「道の駅」をテーマとし、③留萌管内のほとんどの市町村にある「道の駅」をテーマとすることで波及効果が期待される、という気付きを得て、次年度以降、道の駅をテーマとした授業づくりにとりかかることとなった。



写真-1 道の駅フィールドワークの様子
（左：道の駅おびら鯉番屋、右：道の駅るもい）

一方、留萌管内にはシーニックバイウェイと高等学校が連携しサイクルツーリズムの振興活動を蓄積していたことから、「みち学習」との親和性が高く、「みち学習」への参画を打診したところ快諾いただいた。このようなことから、同年度より北海道苫前商業高校においても、“高等学校ワーキング”と称し「みち学習」の展開を検討することとなった。

高等学校ワーキングでは、商業科「課題研究」科目に着目し、苫前商業高校稲瑞希教諭を中心に「みち学習」の展開可能性を検討した。「課題研究」は主に、商品開発、開発企画、販売企画等を中心に生徒が自ら商業に関する課題を設定し、探求する科目である。小学校ワーキングと同様、新保理事長の指導のもと3回にわたる打ち合わせの結果、「観光商材の開発」をテーマとした授業を開発する運びとなり、次年度に実施する年間指導計画を策定した。

(3) 留萌管内みち学習検討会の設置

前項で記述した小学校及び高等学校ワーキングでの検討の進捗を共有する機会として、留萌管内みち学習検討会を設置した。

検討会では両ワーキングの教諭に加え、苫前商業高校と連携を深めるシーニックバイウェイ北海道萌える天北オロロンルート運営代表者会議及び苫前町教育委員会、また、「観光商材の開発」をテーマとするため地元旅行会社（株）コササルも検討会委員として参画いただき、「みち学習」を検討・実践・評価する体制が構築できた。

なお、本検討会の特徴は2点ある。一つ目は、みち学習の実践校として高等学校が参画しているのは、道内唯一である点（令和6年度時点）。二つ目は、シーニックバイウェイをはじめ地域団体や民間団体が検討委員として参画し、官民学総出による推進体制を構成している点も特長的と言える。

3. 2か年目（令和5年度）

2か年目（令和5年度）は、1か年目の小学校及び高等学校ワーキングにて検討した授業アイデア案に基づき、学習指導案や地図・写真等の資料を作成するとともに、実践授業を試行した。

(1) 小学校における「みち学習」の開発

1年目の検討結果（2. (2)参照）に基づき、「道の駅」をテーマとした実践授業を計画した。

対象学年・科目・単元は、小学校3年生社会科「わたしたちの市の歩み」とした。この単元の学習目標は、地域の移り変わりの学習を通して、必要な情報を調べまとめたり、社会課題の把握とその解決に向けた関わり方の探究や地域社会の一員としての自覚を涵養することであり、「みち学習」とも親和性の高い単元と言える。

このような公共施設の働きや街の変遷を取り扱う単元の授業として、担当教諭の勤務校（留萌市立留萌小学校）の近くにある公共施設「道の駅るもい」を学習素材として当てはめることとした。

授業化においては、「道の駅」が有する一般的な機能を学習するとともに、令和2年度の留萌ICの供用開始前後の「道の駅るもい」の立地環境や交通の変遷に着目し、交通結節点及び「留萌地域のゲートウェイ」としての「道の駅るもい」の役割も学習課題とした。

① 道の駅デジタル動画教材の作成

上記の学習目標・学習課題を狙いとした実践授業の試行に向け、高橋教諭を中心に授業づくりを行った。

具体的には、授業計画の作成、教材の作成である。そのうち、主要な教材のひとつであるデジタル動画教材について紹介する。

道の駅及び道の駅るもいを学習する教材として、近年の小学校教育における加速度的に進展するデジタル化（GIGAスクール構想）に倣い、デジタル動画教材を作成した（図-1）。今回作成した動画は7本で2時間分の授業に対応している（表-2）。前半の1時間は、道の駅の休憩機能（動画内では「休む」）・情報発信機能（動画内では「知る」）・地域連携機能（動画内では「楽しむ」）を学習する授業である。後半の1時間は、「道の駅るもい」に特化した内容であり、「道の駅るもい」の立地する環境を紐解くにあたり、モータリゼーションの普及に伴う交通モードの移り変わりや土地利用の変化、

表-2 作成した道の駅るもいの動画教材とその学習過程上の位置づけ

	実践授業① 「道の駅るもいってどんなところ？」	実践授業② 「道の駅るもいはどんなところにある？」
対象学年 単元	小学3年大単元（わたしたちの市の歩み）	
学習目標	▶ 「道の駅るもい」を通して公共施設の働きを考える。 ▶ 「道の駅るもい」を通して、留萌市の交通や公共施設の変化を考える。	
動画 の内容	動画① 道の駅るもいについて知ろう！	動画⑤ 道の駅るもいの歴史① (車が普及するまで)
	動画② 道の駅の3つのはたらき (その① 休む)	動画⑥ 道の駅るもいの歴史② (車が普及してから)
	動画③ 道の駅の3つのはたらき (その② 知る)	動画⑦ これからの道の駅
	動画④ 道の駅の3つのはたらき (その③ 楽しむ)	

現在の「道の駅るもい」が必要とされた経緯を学習するとともに、これからの「道の駅るもい」の発展や市民としての役割を考えるといった授業内容である。動画の内容は各時間の学習内容とも対応している。これらの動画作成には、小学校教諭と当部に加え、新保理事長、道の駅るもい指定管理者で留萌観光協会長の4者でオンライン会議を複数回行い、内容の精度を高めた。

なお、動画作成にあたっては以下の点に留意したことを添えておきたい。①児童が見飽きないように1本あたり約90秒の時間とし、②作成コストを節減するためにAI音声を活用、③キャラクター3種は多様性に配慮し無生物のキャラクターを採用した。

また、動画⑤・⑥では留萌市海のふるさと館学芸員に協力いただき市内の過去の写真を提供いただいたり、動画⑦については道の駅るもい管理者にも出演いただき、市内の関係者からの理解と協力を得ながら作成した。



図-1 道の駅デジタル動画教材

(左：動画内のキャラクター3種、右：動画⑦では道の駅るもい管理者にも出演いただいた)

② 実践授業の実施

授業計画や教材の作成を経て、「道の駅」をテーマとした実践授業を令和5年11月2日留萌市立留萌小学校で、市内小学校教諭等を対象とした公開授業として行った(写真-2)。

また、実践授業直後には参観者による意見交換会を行った。以下、主な意見を掲載する。参観した教諭からは地域学習用の教材が不足している実情が指摘され、今回作成したような地域学習用教材の開発にニーズがあることが改めてわかった。



写真-2 実践授業の様子

- ・ 1つのスピードに対して速いと感じる子と遅いと感じる子がいるため、全ての子どもに合わせるのは無理である。そこが一斉授業の限界で、ビデオクリップの良さは自分のペースで学ぶことができ、個別最適な学びとなることである。
- ・ 同じ市内の小学校教員として、留萌のことを教えるのがとても難しく、教科書は違う地域のことなので使えないといった悩みもあり、今日使用した動画が欲しいと思った。
- ・ 年表づくり等動画教材以外の単元ごとの教材パッケージを作る支援も必要では。
- ・ 市の校長会でみち学習の情報提供を行った。みち学習が働き方改革にも呼応したポジティブな雰囲気や期待感が作っていければ良い。
- ・ 子どもたちがより意味づけしたり、価値づけしたりできるような発展性が隠れていると感じた。
- ・ 社会が得意でない先生もできるような教材づくりとその環境づくりが最終的なゴール。

(2) 高等学校における「みち学習」の開発

① 実践授業を通じた観光商材の開発

1年目の検討結果(2.(2)参照)に基づき、「観光商材の開発」をテーマとした実践授業を計画した。苫前商業高校では、商業科「課題研究」の授業を通して、「留萌管内の地域資源を活用した観光ルートづくり」を授業課題と設定した。この単元は商業に関する課題を設定し、その課題の解決を図る学習を通して、専門的な知識と技術の深化、総合化を図るとともに、問題解決の能力や自発的、創造的な学習態度を育てることを学習目標とし、調査、研究、実験、作品制作、産業現場等における実習、

職業資格の取得と多岐に渡る。「みち学習」においては調査研究やそれに基づく提案を中心とした実践授業を企画した。

そのため、実践授業は4月中旬から始まり7月下旬まで（厳密には調査研究報告書の作成まで含めると12月末まで）と長期間となった。表-3は令和5年度の苫前商業高校における「みち学習」の実践の記録である。「観光商材の開発」にあたり、4月中旬に観光やオロロンラインについて外部講師を招いた講話の機会を設け、以降は町内・留萌管内の地域資源を貸切バスにてフィールドワークし（写真-3）、生徒たちは観光商材の開発に向けた課題をフォーカスするとともに、現地調査を行った。

開発した観光ルートは6月中旬の中間発表及び7月下旬の完成お披露目会にて校外の方からの意見を取り入れ、生徒自身の提案内容の磨き上げの機会とした。これら一連の過程を通して、地域資源の抽出や課題の発掘、それらをまとめ提案する素養を得るとともに、留萌管内を改めて知り、地域への愛着を持ってもらう機会ともなり、観光教育³⁾にも貢献できる学習内容となった。

表-3 苫前商業高校における「みち学習」の実践

日付	授業内容
4/21	観光やオロロンラインについて外部講師を招いた講話
4/28	苫前町の地域資源についてのFW (苫商→上田ファーム→苫前漁港→道の駅風W→上平ウインドファーム→緑ヶ丘公園)
6/12	留萌管内の地域資源についてのFW (国稀酒造・増毛駅、黄金岬・道の駅るもい、上平ウインドファーム等)
6/22	中間発表
6/27	留萌管内の地域資源についてのFW (オロロン鳥モニュメント、ばら園等)
7/21	留萌の魅力発見モデルコース発表会
3学期	課題研究集録の作成



写真3 フィールドワークの様子
(左：国稀酒造 右：上平ウインドファーム)

② 提案された観光ルート

以下、生徒たちから提案された観光ルートを一歩紹介する（表-4）。

表-4 生徒たちから提案された観光ルート

コースの名前	コースの内容
高校生が経験したものの観光コース	・ 高校生が経験したものを追体験する観光コース ・ 1泊2日の親子を対象。管内の食や施設の光資源を巡るコース
道北海沿麺ツアー	・ 道北の魅力的な海鮮や特産品を利用した麺類を食べるツアー ・ 秋冬における留萌～羽幌～天塩間のバスツアー
日帰り食い倒れツアー	・ とにかくご飯をたくさん食べることを目的とした観光コース ・ 夏期日帰りで、留萌～増毛～小平の各地の食事を楽しむ。

③ 実践授業の振り返り

約半年間にもわたる実践授業の振り返りを、留萌管内みち学習検討会（令和6年2月26日）にて行った。以下、主な意見を掲載する。これらの発言内容は3か年目の取り組みに引き継がれることとなった。

- ・ 地域資源に改めて気づき、資源と資源を結ぶ道路や移動を考えた高校生らしい取り組みだった。
- ・ 今年度は立上げの年度だったのでまずは生徒の気持を乗せることを念頭に置いた。ただ、それでは体験学習の域を出ない。
- ・ 次年度は、商業高校とみち学習が連携することで、実践授業の成果に楽しさもあり、リアリティもあり、「稼ぎ」を学べることを目指すべきで、それが、みち学習の完成版となると思う。
- ・ 自分の将来や職業選びにつながるような授業へと展開することを期待する。
- ・ インフラを作る立場からだ、留萌に来やすくするためのインフラの整備は整った。一方、人口減少下において、関係人口・交流人口を取り込むことが必要で、道路インフラの整備でそれを行うことが可能となったことを踏まえ観光商材を作っていくってほしい。また、将来地域の担い手として貢献できるような授業になってほしいと思う。

4. 3か年目（令和6年度）

3か年目（令和6年度）は、2か年目の小学校及び高等学校での実践授業の結果を踏まえ、小学校ワーキングはデジタル動画教材の普及及び地域学習用教材の更なる開発、高等学校ワーキングは商業科科目と「みち学習」の整合をより高めていく方向性の下、活動を展開した。

(1) 小学校ワーキング

3か年目（令和6年度）における小学校ワーキングは、2か年目に開発したデジタル動画教材の普及及び地域学習用教材の更なる開発を行った。

① デジタル動画教材の普及

デジタル動画教材は、留萌地方社会科教育研究会（留萌管内の社会科を専門とする小・中学校教諭のグループ）の共同サイトを通じて動画データを配布している。また、令和6年7月下旬には認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムが教材提供サイト『なるほど！北海道』を創設し、そのサイトからストリーミング再生できるようになった（図-2）ことから、より配布・閲覧環境が整備された。



図-2 なるほど！北海道

（左：トップ画面、右：ストリーミング再生のため、よりギガスクール環境に対応できるようになった）

② 留萌管内デジタル副読本の作成

2か年目の課題として、「留萌のことを教えるのがとても難しく、教科書は違う地域のことなので使えない」といった悩みが挙げられた。管内の小中学校教諭が減少するとともに、地域学習の教材づくりの担い手も減少している。また、働き方改革下にあっては教材づくりに充てる時間も確保しづらいのが教諭たちの置かれた現状である。このような「悩み」に応えるべく、留萌管内で使用できるデジタル副読本を作成する。対象単元は小学4年生社会科「県の地図を広げて」である。この単元では、3年生社会科で学習した自治体の学習から「県」により圏域を拡大して学習することが求められている。ここで本取り組みでは、「県」を「留萌地方」と置き換え、留萌地方の地形・産業・交通を学習できる教材づくりを企図している。

当部では「みち学習」を所管することもあり、地方版デジタル副読本は交通の領域の教材づくりを支援している（図-3）。今年度中の完成に向け、現在鋭意作成中である。

③ 国語科における「みち学習」

また、小学校ワーキングは過去2か年は留萌小学校の教諭が中心で活動していたが、3か年目は他校教諭も参画している。そのうち小平町立鹿鹿小学校の藤井志帆教諭に、小学校3・4年生複式学級の国語科にて実践授業を試行していただいた。

対象単元は、小学校3年生国語科「俳句に親しもう」および4年生国語科の「短歌の世界」である。自分のお気に入りの道や風景の写真に俳句、川柳、短歌、詩など、児童が表現したい方法を選び添える。できた作品をみんなで音読して楽しむ。活動の最後に、改めて道や風景について考えたことや思いを話し合う授業を展開した。



道の駅動画と同様のキャラクターを用い、統一感を持たせた。



留萌管内の一般国道、高規格道路の説明



「陸の孤島」であった雄冬地区の国道供用までの経緯

図-3 留萌管内デジタル副読本

令和6年10月31日開催の発表会までには、スクールバスに乗り、町内の風景や観光施設などを訪ね「自分のお気に入り」の写真を撮り貯めたり、道すがらのバイカーにインタビューをしたり、小平防災事業の現場見学会でも俳句や短歌の素材を収集した。

発表会（写真4）では、それぞれがスライド資料を用いてお気に入りの風景写真とそれに添えられた言葉が紹介された。紹介された写真の中には、道路を題材にしたものもあり、道路の役割や道路景観の美しさ、それらを支える働き手の存在等にも言及があり、「みち学習」のテーマである「みち」そのものへの理解や地域への愛着の醸成に十分に貢献する授業であった。授業後の意見交換会では新保理事長が「見える風景から見えないモノを見る」授業だと評し、他校での一般化に向けた環境整備（俳句の作り方を学習する動画の作成等）が提案された。



写真4 発表会の様子

(左：発表の様子、右：小平防災工事現場見学時の写真で作成した俳句)

(2) 高等学校ワーキング

① 実践授業を通じた観光商材の開発

令和6年度の実践授業も5月中旬からはじまり10月下旬まで（厳密には調査研究報告書の作成まで含めると12月末まで）と長期間となった。表-4は令和6年度の苫前商業高校における「みち学習」の実践の現時点での記録となる。今年度は、学校設定科目「オロロンデザイン」を活用した授業で、稲教諭の後任の苫前商業高校虎野正嗣教諭の指導の下、昨年度と同様観光商材の開発を行った。

表-4 苫前商業高校における「みち学習」の実践

日付	授業内容
5/13	観光やオロロンラインについて外部講師を招いた講話
6/18 6/25 7/2	留萌管内の地域資源についてのFW（留萌北部・中部・南部）
7/22	中間発表
10/22	オロロンデザイン発表会
3学期	課題研究集録の作成

② オロロンデザイン発表会

令和6年10月22日、苫前商業高校にて、調査研究成果をもとに地域資源を活用した観光商材を提案する「オロロンデザイン発表会」が開催された。以下、生徒たちから提案された観光商材を紹介する。

観光商材	内容
カントリーサイン	・留萌管内のカントリーサインを現代風にポップにデザインする。
自転車ツーリング	・自転車ツーリング事業に参加する中で体感した道路整備上の課題や追い越しマナーの啓発（1.5m運動）等の提案
ドライブルート	・国道以外の町道や道道をできるだけ通り稚内方面へ北上するドライブルートの提案
道の駅	・管内来訪者に向け、管内の道の駅等の特徴や見どころを紹介

また、授業後の意見交換会では、商業科ならではの観点と取り組みを授業に組み込むことや、1・2年生の段

階でテーマを決めリサーチして、3年生で実際に実践するといったカリキュラム構成も提案があった。一方、令和5年度の「みち学習」で活用した「課題研究」とのカリキュラム上の棲み分けが困難といったカリキュラム運用上の課題も生じ、次年度以降、カリキュラムの精査作業を行った上で、「みち学習」の実践が必要となる。

5. さいごに

当部における3か年にわたる「ほっかいどう学」、とりわけ「みち学習」の取り組みについて、その立ち上げの経緯も含め報告した。

当部の「みち学習」は、小学校のみならず高等学校も主体とする取り組みもあり、道路管理者・教諭のみならず、シーニックバイウェイや地元旅行会社等多様な主体で教材づくりに取り組んでいるところに特長がある。このような体制のもと、2か年において小学校ではデジタル動画を7本製作し、管内デジタル副読本の作成にも着手した。高等学校では半年間にもわたる実践授業を2か年続け、熟度も高まり、大きな成果を得ることができた。

これらの成果の動機となったのは、人口減少率が道内ワースト2位である^{注1}この地域が学校教育においても課題先進地域であることを示唆している。教諭の減少とともに地域学習教材の不足は、地域学習の質的低下を招く。このような教諭や地域に潜在する危機感が、現在の推進体制と教材づくりの成果を後押ししたと考える。

今後「みち学習」ひいては「ほっかいどう学」は、これらの地域が抱える教育課題にも目を向け、「ほっかいどう学」の推進とともに地域の教育課題の解消に貢献していく必要があると考える。

引き続き、教諭に必要とされる地域学習用教材づくりを地域協働で進めるとともに、これらの管内への普及・浸透のステージへと歩を進めたい。

注

1) 住民基本台帳人口（北海道総合政策部計画局統計課生活統計係調べ）に基づき、振興局別の令和元年度と令和6年度の人口の増減率を著者で算出した。

参考文献

- 留萌開発建設部：令和4年度施行留萌開発建設部管内協働型道路管理計画検討業務報告書、2023。
- 干場 宏幸、宗山 徳史、小西 信義：留萌開発建設部管内における地域活性化の取組-サイクルツーリズムからのアプローチ-、65回北海道開発技術研究発表会、2021。
- 谷野 淳、岡本 純一、喜早 智：オロロンライン・サイクルルートの取組-留萌地域のサイクルツーリズム-、67回北海道開発技術研究発表会、2024。
- 観光庁：観光教育の普及。 https://www.mlit.go.jp/kankochou/seisaku_seido/kihonkeikaku/jizoku_kankochi/kankoijnzai/chishikifukyu/kyoiku.html、最終更新日：2024年4月17日。